

# ディープ・ブルー (DEEP BLUE)

2004(平成16)年9月20日鑑賞(三番街シネマ)

★★★★



共同監督・脚本＝アラスデア・フォザーギル&アンディ・バイヤット／製作＝アリックス・ティッドマーシュ&ソフォクルス・タシュリス／音楽＝ジョージ・フェントン／演奏＝ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団／ナレーション＝マイケル・ガンボン（東北新社配給／2003年イギリス・ドイツ合作映画／91分）

……なんとも美しい、海の世界の中で繰り広げられる魚や鳥そしてペンギンたちの生態。よくもこれだけ美しくかつリアリティのある映像が撮れたものだと感じ！そして、バックに流れるのは、ベルリン・フィルハーモニーの美しい音楽。91分の「至福の時」を与えてくれた『ディープ・ブルー』に感謝！

## 初めてのベルリン・フィルハーモニー管弦楽団との共演！

この映画は、記録映画、そして海の中の魚や動物たちの姿を描くものだから、主人公はものを言わぬ生きものたち。したがって、スクリーンにどこまで観客の目をひきつけることができるかは、視覚だけではなく聴覚、つまり音楽の出来によることになる。そこで登場したのが、映画音楽初共演となる世界の名門中の名門、ドイツのベルリン・フィルハーモニー管弦楽団だ。

そして、この映画の音楽をすべてつくり、ベルリン・フィルハーモニーを指揮したのは、ジョージ・フェントン。1950年生まれだから、私と1つ違いだが、何ともすごい才能の人物がいるものだと感心。節目、節目で短く入るナレーションを聞きながら、この映画音楽に聴き入るだけでも、別世界に入りこむことができ、心が洗われ癒されることまちがいない！

## この映画の撮影はほとんど奇跡！

この映画は、「青い地球」を形づくる海とその中の生きものたちのさまざまな

姿を描いたもの。原題の『DEEP BLUE』は、本当にこの映画にピッタリのタイトルだ。この映画には、起承転結(?)があり、大きく4つのテーマで構成されている。そして、それぞれのテーマ毎に、さまざまな生きものたちが登場する。その4つのテーマと登場する生きものたちは次のとおり。

- ①「海に生きるもの、その生態」(マユグロアホウドリ、コメツキガニ、コウテイペンギン、ホッキョクグマ、シロイルカ、シャチ)
- ②「生か死か、壮絶な攻防」(ケープシロカツオドリ、マイルカ、クロヘリメジロザメ、ミナミアフリカマイワシ、コククジラ)
- ③「サンゴの楽園、深海の神秘」(サンゴ礁、ジンベイザメ、ネムリブカ、ベリカンアンコウ)
- ④「青の砂漠の旅人たち」(マンボウ、ヒメウミガメ、アカシユモクザメ〈別名：ハンマーシャーク〉、シロナガスクジラ、ハシナガイルカ)

これらを見れば、どんな生きものたちがどのような形で登場してくるか、ある程度想像できるはずだ。もっとも、全体を通してみると私の「見たて」では、魚類ではシャチ、哺乳類ではホッキョクグマ、鳥類ではマユグロアホウドリの3種か……?

そして、パンフレットには、その撮影の苦労話が紹介されているが、映画を見終わった後、これを読むと、その撮影はほとんど奇跡としかいいようがないもの。よくぞ、ここまで撮影したものだと感じさせられることまちがいない。「製作7年、撮影フィルム7000時間、ロケ地200ヶ所」という表示が決して誇大表示ではないこと、また「世界で一度だけの壮大な冒険がはじまる」という表現が決して誇大表現ではないことがよくわかる。

## 日本でも次第に上映館が拡大!

90分間の長編ドキュメント映画の製作は、すごく勇気のいる仕事。というより、かなりの冒険で、バクチに近いものだ。なぜなら7年の年月と7000時間の撮影フィルムを使って映画を製作しても、それがヒットしなければ大赤字となってしまうことは必至だから。

パンフレットによると、そのような意見(というより当然の正論)が多かった

にもかかわらず、この映画が実現できたのは、長年イギリスのBBCで自然ドキュメンタリーの製作に長く携わり、英国アカデミー賞に輝く話題作も手がけているアラスデア・フォザーギルとアンディ・バイヤットの2人の監督と、「ドキュメンタリーの新分野を開拓したい」と考えていたBBCの女性プロデューサー、アリックス・ティッドマーシュたちの「執念」によるものだろう。

日本では公開時期が当初予定の11月から7月に変更された。そして当初、全国約50館での上映で動員数は約56万人となり、静かな広がりを見せてきた。そして今では上映館数130館を目標にするなどその人気は高まり、興行収入10億円を目指していると新聞報道されている（04年9月25日 日経新聞）ほど。あなたも是非、このブームに乗ってみてはいかがが……？ 2004(平成16)年9月26日記

ミニコラム

### 映画音楽を楽しもう。—— 汝、席を立つことなかれ！

今私の手に淀川長治『映画音楽館』のCD全10巻がある。私は小さい頃から音楽が大好き。自分でピアノやギターが弾けたら、と夢みることもたびたび……。私の音楽好きは、聴くこと、歌うことだけでなく集めることにも及び、クラシックレコード（LP盤）の収集数は膨大なもの。歌う方（カラオケ）は演歌からニューミュージック、そして最新のヒットナンバーまで。とりわけ若い女性歌手の歌が大スキという変なおじさん？ 聴く方もジャズからクラシックまでオールラウンド。

映画と映画音楽は切っても切れない関係だが、「名作」と言われる昔の映画は、今以上にそれが強かった。だからこそオリジナル・サウンドトラック

と呼ばれる映画音楽の名作が今でも人気を集めているし、人気映画音楽ベスト100という類のテレビ番組が根強い人気を集めるわけだ。そういう目で見ると、この『ディープ・ブルー』の音楽はたしかにすばらしいが、スクリーン上の映像との結びつきはちょっと薄い。したがって『風と共に去りぬ』（39年）をはじめとする「あの名作」では、「あのシーン」に「あの音楽」が流れていたことがくっきりと脳裏に残っていることに比べると、やはり映画音楽のインパクトは弱い。映画を観る楽しさは、映画音楽を聴く楽しさによって倍増されるもの。くれぐれラストの字幕が流れる中で聴こえてくる感動的な音楽を聴き残したまま席を立つことだけはやめてほしいものだ。